



言いたいことがあります

丸木 俊

筑摩書房



言いたいことがありすぎて

丸木 俊

筑摩書房

丸木俊（まるき・とし）

画家。1912年、北海道に生まれる。女子美術専門学校卒業。1941年、丸木位里と結婚。1950年、共同制作「原爆の図」第1部“幽霊”を描き、1972年、第14部“からす”を完成。世界各国で「原爆の図展」開催。以後、「南京大虐殺」「アウシュビッツの図」「水俣の図」「沖縄戦の図」などを制作。著書に『おしらせま』『ひろしまのピカ』『女絵かきの誕生』などがある。

言いたいことがあります

一九八七年一〇月三〇日 第一刷発行
一九九六年三月一〇日 第四刷発行

著者 丸木 俊

発行者 森本 政彦

製本刷 中央精版

発行所 筑摩書房

東京都台東区蔵前二一五―三
振替〇〇一六〇一八―四二二三

ご注文・お問い合わせ、乱丁・落丁本の交換は左記宛へ。
〒三二一 大宮市榎引町二一〇 筑摩書房サービスセンター
TEL 〇四八五二一〇〇五

言いたいことがありすぎて・もくじ

第一部 山んばのたわごと

チビチリがまの教え

——「沖縄戦の図」を描き終えて

じいじ・ばあばが話し始めた

渡嘉敷島での集団自決

沖縄の村長さんの話

丸木スマを思い出す

痛恨の碑

奇形の天使たちのこと

自分の命は自分で守る

9

68

81

第二部 山んばのツツラから

半生の記

103

原爆から出発して

140

丸木スマの叡智

152

反原発

158

ドナウの彼方

163

絵本とわたし

176

沖縄戦を子らに伝える

185

水俣の母子像

190

地獄

195

ふたたび "コリヤサの文明" を

199

〈あとがき〉

黙っていればいいものを

203

装画・カット
著者

言いたいことがあります

第一部 山んばのたわごと



チビチリがまの教え

——「沖縄戦の図」を描き終えて



じいじ・ばあばが話し始めた

「沖縄戦の図——よみたん村三部作（チビチリがま・シムクがま・残波大獅子）」の絵に、次のような文章を添えたのは、ことし（一九八七年）の一月のことです。

「沖縄読谷村ヨミタンソンのチビチリというがま（自然の鍾乳洞しょうにゅうどう）に来ています。村の谷間。

小さな川ががまに向かつて流れて来ていて、はたと消えてがまの底深く落ちていつている。やがてそれは海に出ているはずなのだと教えて下さる。

中は、腰をかかめ背を丸くしなければ通れないところが、あちこちにある。息苦しい思いが地形的にもある。

「集団自決をしよう」

と、言い出したのは従軍看護婦さん。身内のものたちに毒薬を注射しはじめた。注射してもらって死んでいく人をうらやましいと思ったにちがいない。持ち込んだふとんを積みあげ、着物をぬいでランプの石油をかけて煙にまかれて死んでいた集団自決の場所なのです。

靴の下にかすかな音がした。ライトをあててもらってみると小さな骨がまだ落ちていたのです。

「首を切って下さい早く。右じゃない左の方」

と叫んでいる若い女の人がある。左側の方が心臓に近いから楽に死ぬる。なま温かい血が飛んで来た。「てんのうへいかばんざい」と叫ぶ声もきこえてくる。

「煙にまかれて苦しんでいる。燃える炎で赤く見える。抱いている赤んぼうが煙にむせて泣き叫ぶ。煙で死ぬよりアメリカの鉄砲で殺された方がいい、わたしは子供をかかえて這い出したのです」

「アメリカが毒入りのものを食べさすというから楽に死ぬると思って子供をつれて出たのです」

生き残ったわずかの人、今は老いた女の人たちが話してくれる。

もう一つシムクがま、というのがある。全員助かったという。

ここにはハワイ移住から帰った二、三人がふくまれていた。

「死に*いそぎ*しないように、捕虜は殺さない、といっているから」と通訳した。

けれどみんなは納得しない。

「お前はアメリカに味方するスパイではないか」

と、疑いの目をむけられた。

「暗く、息苦しいが、まですのまま死ぬより、青い空を見てからみんないっしょ

に死のうではないか」

と呼びかけてみた。人々はいわずいて少しずつ外に出た。そうして一〇〇〇人程もの老人や子供や男や女が、そのまま捕虜となって生きのびたのです。

チビチリが、まで生きのびた人も、シムクが、まで生き残った人々も四〇年もの間一言も語ろうとはしなかった。

死んでいった大勢の人々に対して生き残ったことを恥ずかしいと思っていたのだろうか、悪いことをしたと思っていたのだろうか。

素朴で善良な人々に君が代を歌わせ、日の丸をあげさせ、「てんのうへいかばんざい」を叫ばせ、竹槍を持たせ、捕虜の辱めはずかしを受ける前に死ね。と、教えた。

その教えのように人々は死んでいったのです。

今、再び日の丸を揚げさせ、君が代を歌えということです。軍靴の音が再び聞こえて来ます。

たかが旗じゃないか、布きれじゃないかと眺めている目から、たかが歌じゃないかと聞いている耳から入って胸に腹に沁み通って、やがて侵略の魂を持った日本人に育っていくのです。中国を侵略し、アジアをふみにじり、そうして遂には自らをも殺す玉碎、自決、集団自決にまで発展していくのです。

日の丸・君が代が沖繩を覆いつくす時、何がはじまるのか。

日の丸・君が代が日本列島を覆いつくす時、何が起るのか。

一九八七年一月沖繩読谷村にて

丸木位里

丸木 俊

「沖繩戦の図」を描き終えて、展覧会に持って行き、陳列しようとしたとき、沖繩から電話がかかりました。テレビ見ましたか。

読谷村の高校生が卒業式のときに、

「日の丸を掲げないでください。わたしたちは、日の丸の下で卒業式をしたくな

い」

と言ったら、校長先生が、

「そんなことを言うもんじゃない。やっぱりあげた方がいいんだよ」

と言って、日の丸を掲げたんですね。それに対して、

「日の丸は侵略の旗です」

と、高校生たちが走って行って、旗を引きずりおろし、ドブに捨てた。泣きながらドブの中に捨てたそうです。女の子たちです。それがテレビのニュースに出たけれど、観たか、という電話でした。

わたしは観ていなかったんですね。オイオイ泣きながらやったんだそうです。わたしは、それを聞いて、よくやったねえ、と思いましたよ。

他にも、北谷^{チヤクシ}という村で、高校生が、

「君が代で戦争が起きたんだし、日の丸を振りかざしながら、日本が中国に攻めこんだり、沖縄にやってきたり、フィリピンにも、マレーシアにも行って人々を苦しめたんだから、そういう旗のもとで卒業式はやりたくない」